



手が冷たいとズが温かい、
のか？



初めて君の手に触れたのは、寒くなってきたね、なんて当たり障りのない会話をしていた頃だ。

「俺って、手冷たいですか？」

そう言いながら突然手のひらを差し出されて、一瞬戸惑ったけれどその手を掴まずにはいられなかった。

天井まで届きそうな本棚と、びっしりと積まれたハードカバーや文庫たち。すべて、物語。それが、私が私のままでいられる唯一の空間だった。

「手、冷たいね」

「そうですか？ 分かりません」

淡々と口にしながら、私の手を握ったり離したりするのを君は繰り返す。

誰かと比較したことなんてないと言いたそうな君。

私が初めてなのかな、なんて馬鹿なことを思ったりもして。

君はイヤホンを片耳だけ外して、私の方に耳を傾けてくれていた。

これでもだいぶ進歩だ。

「あたたかいですね。いいですね」

そんな風に言われるのが恥ずかしくて、咄嗟に私は「手が冷たいのは、心が温かいからだよ」と口にする。

途端に君は、面食らった顔で私を見た。

「どうして手が冷たいと、心が温かいんですか」

「さあ？ ことわざじゃない？ でもよく聞くよね」

私が離してからも、君はずっと不思議そうに自分の手を見つめていたのをよく覚えている。

あの頃、どこまでも続く浅い海でじゃれ合うように、君に触れていた。

でもひょっとしたら、この時もう既に、君は傷付いていたのかもしれない。

そう気付いたのはずっと後のことだ。

ねえ、いつから私は、間違っていた？

寝付けない時は本を読むと眠れるとはよく言うけれど、続きが気になるせいで読み終わるまで寝られるわけがない。

そう分かっているもついでに読んでしまうのは、眠りに落ちるために読んでいるわけじゃないからだ。

理由なんて必要がないぐらい、私にとって読書は欠かせない。

だからって、一限の必修を落としてもいいかと聞かれると別の話だけれども。

予鈴が鳴って急いでいるつもりなのに、重たい体を支えるので精一杯の短い足じゃあ、走っているつもりでも早歩きにしかない。

おまけに寝不足なのと朝食を抜いたせいで、エンストを告げるような息切れで立ち止まってしまう。

そんな私の横を、日差しに照らされた長い長い影が過ぎった。

コンクリートの地面に映る違和感に気づき、私は思わず顔を上げる。

音楽を聴きながら歩く人なんていくらでもいるけど、君の耳から伸びる白のケーブルはポケットの中を経由して、手に持った黒いバッグの中まで繋がっていた。

影だけ見るとその姿は何だか、小さい頃によく遊んだりモコン式のロボットを彷彿とさせる。

ケーブルが繋がってないと、前にさえも進めないおもちゃ。

そんな奇妙な影の持ち主である君は、その大きなコンパスのせいであつという間に通り過ぎ、大教室へと続く外階段を上っていく。

その姿が印象的でつい引き寄せられたけど、始業のチャイムが鳴るのを聞いて、慌てて後を追いかける。

再び早足になりながら、昨晚読んだ本のことを自然と思い出していた。

それは、恋人が片時も離さずにいた鞆を亡くなった後に受け取る話だ。

その本の帯には『鞆の中には何がある?』という、本文中に全くない文が書かれている。

けれど、鞆の中身を当てることに重きを置いた作品ではないことは読んだ誰もが分かるだろう。

最後のシーンから自然とその中身に思いを馳せたくなる。

主人公が最後に受け取った鞆の中は、からっぽだった。

その鞆が彼女の手元に残されたのはどういう意味なのか、読み返す度に考える。

君が持つバッグから伸びたケーブルは、そのまま耳にまで繋がっていて。

ケーブルによって君の身体と繋がるバックは、まるで常に点滴を受け続けていないと生きられない人と同じ、体の一部のように見える。

輸液の代わりに、そのバッグの中に詰まっているものは一体何だろう。

そんなことを考えてしまう私は、君に目が奪われていた。

講義開始前の喧噪の中でも、イヤホンを挿したまま大教室に一人佇む君の周りだけ空気が違って見えて、後から教室に入った私でもすぐに姿を見つけられた。

五分遅れで教授が入ってくると、次第にざわつきも止む。

今日の内容も去年と同じだと分かると、私はバッグの中から本をそっと取り出した。

ハードカバーなのに持ち歩いては何度も読み返したその本は、振り返った女性と、その髪と同じ色で描かれた花びらが特徴的な表紙だった。

谷底を埋めるように生えているススキの海原と、波打ち際の蛍。

活字でしか知らない、居心地のいい空間を頭に浮かべながら、時折顔を上げては君の方を見る。

講義中でも君はイヤホンを片方しか外していなかった。

何か言われても仕方ないようにも見えたけど、教授どころか教室にいる誰もが君を気にしていなかった。

そんな姿が、まるで私を見ているようで。

根暗、と指を指されながら初めて言われたのはいつだろう。

記憶をたぐり寄せると、はっきりと自覚したのは恐らく小学校の低学年の頃だったような気がする。

晴れていても教室で本を読んでいると、私の机の前に来ては「やーい根暗。気持ち悪っ」とよく囃し立ててくる男の子がいた。

たまに物語に夢中になり過ぎて、目の前にその男子がいることさえ気付かずにいると、腕に抱えていたボールを私の頭に当ててくるような、そんな子だった。

少しは言い返せば良かったかもしれないけれど、普段使い慣れていない口はそう簡単に開いてくれたりしない。

記憶の中の彼は反応しない私に飽きたように、いつも他の子と一緒に教室を出て行く。

そんな彼の名前も今では思い出せないのに、本を読み終えた時は教室の窓から彼を見ながら、残りの休み時間を過ごしていたのを何故か覚えている。

敵にボールを当ててガッツポーズをする彼を見ていると、自分は根暗と呼ばれる種類の人間なのだと嫌でも気付かされた。

「音がないと、落ち着かないんです」

「音？」私の問いかけに、君はゆっくりと頷く。

初めて見かけた時、君は前の晩に i P o d の充電をしないまま寝てしまい、音楽を聴くためだけにパソコンを持ってきていた。

それでケーブルとバッグが繋がっているように見えたらしい。

私があることを知ったのは、この部屋で君と話すようになってからだ。

一限が終わってから四限が始まるまでの間、自宅生の君は私の家で時間を潰している。

君は持ってきたパソコンからほとんど目を離さなかったけれど。

一つ前の世代らしい縦長の i P o d n a n o を君は常に持ち歩いている。

たまにその充電が切れたりすると、君はまたロボットになる。

コンピュータに繋がれたようなその姿はとても滑稽かもしれないけれど、私は嫌いじゃなかった。

「寝るときも聴いているの？」

「そうですね。音がないと、眠れない」

今も君の右耳には白いカナルイヤホンが挿さっている。

首から吊り下がった左耳の部分から漏れ出る旋律に覚えはなかったけれど、恐らく映画か何かのサウンドトラックのようだった。

聞き慣れない言語で歌う女性の声が部屋の中にも漏れ出ている。

インストロメンタルよりは声が入っているもの。特に女性がいい、と君は言う。

一度だけ i T u n e s の中身を見せてもらったが、歌手に詳しくない私でも女性だと分かる名前がずらっと表示されていた。

アイドルから声優だけでなく洋楽にゲームミュージックまで、ジャンルは問わないと君は言う。

「音楽の容量だけで言うなら二週間分は蓄えがあるから、そのあいだ耳だけは少なくとも無事にいられますね」

君のその片側の耳が、私に向けられるようになってどれくらいが経つのだろう。

教室で一人座る君を見ていた頃、講義が始まるまで常に両耳は塞がっていた。

「音が止まった瞬間が苦手です」

神秘的な女性の歌声がフェードアウトしたかと思えば、すぐにまた違う女の子の音が聞こえて

くる。

今も、囁きのように歌う声が漏れ聞こえてくる。

曲と曲の一瞬の間も気になると言う君の耳には、音のシャワーが絶え間なく届き続けていた。

「俺の身体は音楽で出来ていて、骨の髄から溢れ出ているんです」

君は私の家にいる時も、持ってきたパソコンをテーブルで開いている。

話しかけても、私の方を殆ど見なかった。

お昼過ぎになって、お腹が空いた私が何か作って目の前に持っていくと、君はようやく画面から目を離す。

それでも、イヤホンは外さないまま。

君の隣にはいつだって音楽がいる。

こうして二人でいても、君の片耳は常に塞がっていた。

空いている耳の方を私に向けるせいで、君はいつも横を向いている。

そういえば、講義中も頬杖を突いて左耳だけを教卓に突き出したような格好で受けていた。

正面から君の顔を見た覚えがない。

君の両耳を、私の声で埋めてしまいたいと思うようになったのは、いつからだろう。

一度そう思うと君が帰ってからも、耳だけでなく君の全身が私に向けられるイメージで頭の中がいっぱいになる。

本を読もうとしても、今は自分の中にある物語で満たされてしまい、頭の中に活字が入ってこない。

骨の髄から溢れ出てくるものが音楽だと君は言っていた。

同じように、私にとって物語は救いだった。

ひとりでいても、物語の主人公がそばで語りかけてくれる。

本は絶対に私を裏切らない。

それなのにその本を、物語を、私が拒んでいる。

これはあってはならないことだった。

こういう時は、別れた恋人を遠く離れたフィレンツェにいても想う主人公のように、お風呂に浸かるに限る。

その作者が書いた主人公の誰もが、お風呂を居場所に使っていた。

逃げ場所、と言ってもいい。

主人公たちが悩む時は、いつも必ずお風呂のシーンが出てくる。

そんな主人公たちにやはり自分を被せながら、ぬるめのお湯を張る。

バスタブで足を伸ばしながら考えるのは、どうしても君のことだ。

君はどうして、涼しい顔で私の手に触れられるのだろう。

どうして話していても、いつもイヤホンを付けているのだろう。

どうして、私の方を見てくれないのだろう。

ばしゃん、と水しぶきが上がる。

私が自分の拳を水面に叩きつけたから。

腕に力なんてないけれど、その水音は十分に耳障りだった。

苛立った時の私の癖だ。

ああ、溺れるくらい、このぬるま湯に一生浸っていたかったのに。

『手冷たいですか？』なんて聞くくせに、君はちっとも私のことなど気にしていない。

なのに、君の手に触れた日から——いや、君に出会った時から、私はずっと振り回され続けている。

それなのに、こんなに容易く私に触れられる君は、冷たい人なんだ。

そこまで考えて、自分は根暗なのだとつくづく実感する。

前に君との会話の中で、あだ名を聞かれたことがある。

例の小学生の彼を思い出しながら、根暗と呼ばれていたと答えた。

君は、「そんな。前髪が長いからそう見えるだけですよ」と苦笑いで返す。

でもそうじゃないんだよ、私は根暗なんだよ。

ねえ気付いてよ、私の声を聞いてよ。

そんなことを考えながら、はっとする。

私を根暗だと最初に呼んだあの男の子は。本当は、私と遊びたかっただけなんだ。

最後に君の手に触れたのは、夕暮れの薄闇に包まれたベッドの上だった。

私の家に来た時から、君は眠たそうにしていた。

中間の時期だったせいかわ別の授業の課題に追われ、明け方近くまで寝られなかったらしい。何度目かのあくびを見かねた私がベッドで横になるように勧めると、最初は遠慮したけど結局「じゃあ」と君は仰向けになる。

それまで外していた左耳のイヤホンを君は戻し、目を閉じて寝る体勢になっていた。

いつも漏れ聞こえている音楽が部屋にないせいかわ、君の規則正しい寝息が妙に気になってしまう。

一限の他はテストもレポートもない私は近くに寄り、ただぼうっと君の寝顔を見て過ごしていた。

他人のこんな無防備な姿を見るのは、生まれて初めてかもしれない。

そんなことをぼんやりと考えていたら、いつの間にか私まで横で眠ってしまっていたらしい。気が付いた時には、既に四限開始どころか五限に近い時刻だった。

私の物音で目を覚ました君は、片耳のイヤホンを取りながら時計を見て「大遅刻ですね」と、そう慌てることなく笑った。

私たちはそのまま天井を向きながら、たわいのない話でしばらく時間を過ごしていた。

南向きの窓から入るオレンジ色の光は、そう遠くないうちに日が落ちることを告げている。私が電気のスイッチを入れようとする、君は「点けなくていいです」とそれを遮った。

「いつも暗い中で過ごしているので、そのままでいいです」

それで私たちは明かりを消した部屋の中、ベッドの上で横たわっている。

外灯の光も窓から入ってきて、段々と薄闇に慣れてきた。

それでも内心、気が気ではなかった。

聞こえてくる呼吸の音は、今ここに二人しかいないことを意識させるのに十分だった。

天井まで届きそうな本棚と、びっしりと積まれた物語。

それが、私が私のままでいられる唯一の空間のはずだった。

今はそれらも、影でしかない。

「手、冷たいですね」

「そう……だね」

私の手を握ったり軽く離したり。

前にも同じようなことがあったはずなのに、胸の鼓動を隠すのに私は必死で。

けれど君は、何とも思っていないかのように小さく笑う。

君の耳にはいつものようにイヤホンが挿さっている。

片耳だけ外していても、いつからかその存在が憎くて邪魔で仕方なかった。

その時、たった一瞬だったのに、どうしてか君と目が合ったのを感じた。

ねえ、君。ずっと、話しかけていたんだよ。どうか気付いて、私は――

気が付けば、君の耳に挿さったイヤホンを強く引き抜いていた。

その勢いのあまり、いとも簡単に本体から端子が外れる。

漏れ聞こえてくる音もない部屋に、静寂が満ちた。

一瞬の間。何が起きたかを察した君の顔はひどく歪む。

それは、今までの君からは想像も付かない、世界の果てを見たような顔だった。

咄嗟に私から背を向けたけれど、声にもならない声で君は叫んでいた。

ゴメンナサイおかあさんゴメンナサイゴメンナサイ.....オマエノセイデコウナッタダ。

かすれかすれでようやく聞き取れる声なのに、最後の言葉は鋭利な刃物になって自分に向けられているのが分かる。

それが確かに胸に刺さったはずなのに、似たようなフレーズの合唱曲が何故か頭に響いた。

賛美歌のような曲だったけどそれはサビだけで、女子は出番が少なく暇な曲だったことをひどく冷静になりながら思い出していた。

そのまま後ずさりする私に気付かないまま、君は声を上げながら本棚を揺すぶる。

長い時間をかけて集めた本たちが次々ところぼれ落ちていく。

鈍い音が響く中、私はどうすることも出来ずにただじっと、本が山になっていくのを見ていた。

奥に仕舞っていたはずの児童書も、今は床にぶち撒けられている。

薄明かりが眩しい黄色の表紙を反射していた。

つぎはぎを着た女の子と亀が描かれたあの本は、小学生の頃に買ってもらった物語。

抱えきれないほどの向日葵を持つ女の子とも目が合った。

あれは、生まなければ良かったという母の言葉で、声を失くした少女.....懐かしい物語たちが私を見ている。

だけど私はその本たちを拾い上げることも出来ずに、出来上がっていく山が重さに耐えられずに崩れていくのをただ黙って見ていた。

君の中での儀式が終わったように、たどたどしい手つきで君は首に引っかかっていたイヤホンを手繰り寄せ、両耳にすっぽりと埋める。君の顔は見えない。

漏れ出て聞こえてくる大音量の音楽の中で、ただ息切れしながら立ち止まっていた。

そんな君にかける言葉を私は持っていない。

やがてその呼吸の音が段々と収まる頃になって、君は急に口を開いた。

「手が冷たいと、心が温かいなんて」

周囲の音が聞こえないせいか、加減されていない君の声はとてもよく響いた。

私はそれが怖かった。

「どうでもいい、ですね」

その時、ようやく気付いた。

本当に心が冷たいのは、私だったんだ。